

鈴木哲雄編

『中国禅宗人名索引』

— 附・景德伝灯録人名索引 —

石井 修道

編者の鈴木哲雄先生は、昭和四十一年に駒沢大学の大学院修士課程を修了し、ついで博士課程に進まれて後に、愛知学院大学で教壇に立たれ、現在助教教授として重責を果しておられる。研究の専攻は、中国禅宗史であり、昭和四十八年には、すぐれた研究成果に対して、日本印度学仏教学会賞を受賞されたことは、先生の研究に対して多くの研究者が認めることを証明するものである。特に修士論文の一部報告である「荷沢神会論」(『仏教史学』十四―四、昭和四十四年)の神会研究は、すぐれた成果であり、またこの『中国禅宗人名索引』にも独立して付された『景德伝灯録』の索引と共に『瀧山語録』や禅宗史上にみられる詩偈の研究では独自の分野を開かれている。禅宗史だけでなく、「中国律宗の法系」(『禅学研究』五号、昭和四十五年)の

論文は、先生の緻密な学風を伝える研究であり、最近の論文である「唐・五代時代の福建における禅宗」(『愛知学院大学文学部紀要』第三号)および「浙江の禅宗に関する資料―唐・五代―」(同、五号)を読んだ人ならば、そのことは一見して理解できると思われる。今回出版された『中国禅宗人名索引』は「序」や「あとがき」が示すように「必要は発明の母」のことわざがあるごとく、先生のやむにやまれぬ研究進行上の成果であり、先生の苦勞を二度としないでもよいようにという後輩への利他行が刊行となって実を結んだのである。

この種の索引で、現在研究者に最も多く利用されているのが、『大日本仏教全書』に収められている堯恕編輯の『僧伝排韻』一百八巻であろう。この索引は『高僧伝』・『三宝感

通録』・『統高僧伝』・『法苑珠林』・『大唐求法高僧伝』・『釈氏六帖』・『宋高僧伝』・『景德伝灯録』・『天聖広灯録』・『伝法正宗記』・『大部補註』・『建中靖国統灯録』・『翻訳名義』・『僧宝伝』・『宗門統要統集』・『聯灯会要』・『嘉泰普灯録』・『人天宝鑑』・『釈門正統』・『仏祖統紀』・『五灯会元』・『蓮宗宝鑑』・『仏祖歴代通載』・『釈氏稽古略』・『六学僧伝』・『統伝灯録』・『禅宗正脈』・『神僧伝』・『増集統伝灯録』・『五灯会元補遺』・『統僧宝伝』・『編年通論』・『往生集』・『明高僧伝』・『統仏祖統紀』・『仏祖綱目』・『指月録』・『教外別伝』・『統釈氏稽古略』・『統灯存藁』・『祖庭指南』・『五灯敵統』・『高僧摘要』・『法華持驗』・『華嚴持驗』・『金剛持驗』・『観音持驗』・『浄土晟鐘』の四十八種より、僧伝の索引を排韻で検索できるように作られたもので、『大日本仏教全書』には現代の排韻に不得意な人のために五十音順の索引も付されている。この『僧伝排韻』は禅者以外の人名もみいだせるし、別名・原籍・住居地・師承関係・出典巻数などで、簡単な略伝を知ることができる点で便利なものといえよう。この『僧伝排韻』をもとに『歴代法宝記』・『祖堂集』・『宝林伝』・『楞伽師資記』の四種を加え、一欄表とし

て、四隅番号で索引を編集したものが駒沢大学の篠原寿雄教授の『中国の僧伝』（松ヶ丘文庫、一九六二年刊）の油印本である。この二つの書は、叢書本の一冊である点と絶版のため現在では入手しがたいものである。僧伝を学ぶ者はいつの時代も索引を求めたように、駒沢大学図書館には百六十二部の僧伝類より、僧の略伝そのものを索引として分類した版梶晃全編の元禄元年（一六八八）刊『僧譜冠字韻類』百五十巻も存する。

さてこのような索引類に要求されることは、それを利用する人にとって「便利」である点と、その記載が「正確」である点にあると思われる。

まず第一の「便利」という点について、『中国禅宗人名索引』をみてみることにしよう。鈴木先生が、中国禅宗史研究上において必要を感じられた点からも、うかがえるようにあくまでも「禅宗人名」に限定されたことである。「あとがき」にあるように、まずカードを取ったが、カードでは不便であり、ノート化するといささか便利であり、そこでこの書の刊行になったというのである。本の大きさがA5版で、全頁数が五百五十頁で、最もハンディーなタイプといえる。

次に『僧伝排韻』の出典は巻数で示されただけであるが、頁数と段が示されていて、すぐに検索できる点は、誰もがその便利さの恩恵に浴するであろう。現在の仏教研究者にとって、校訂のよい『大正新修大藏経』および中国文献の豊富な『大日本統藏経』によって研究が進められている訳であるが、研究者共通の校定本の索引が要求されるのは、日本にかぎらず外国においても同じであろう。その点『大正新修大藏経』と『大日本統藏経』の索引として頁数が示されている点は、今までになかった索引である。因みに所収された引用書目は、『伝法宝記』・『神会語録』・『宝林伝』・『祖堂集』を除く単行本以外は、『大正新修大藏経』より『楞伽師資記』・『歴代法宝記』・『壇経』と四十七巻所収の語録および『統高僧伝』・『宋高僧伝』・『大明高僧伝』・『景德伝灯録』・『統伝灯録』、『大日本統藏経』より、『中華伝心地禅門師資承襲図』・『古尊宿語録』・『統開古尊宿語要』・『四家語録』・『五家語録』と別集部の各種語録および『天聖広灯録』・『建中靖国統灯録』・『聯灯会要』・『嘉泰普灯録』・『禅林僧宝伝』・『僧宝正統伝』・『南宋元明禅林僧宝伝』・『五灯会元』・『五灯会元統略』・『増集統伝灯録』・『五灯会元補

遺』の多数にのぼっている。さらに「※」によって本伝を示し「。」によって目録のみであることが知られるので、一層便利である。また『景德伝灯録』の索引が最後に別集さされている点も編者の細かな心ずかいがうかがわれる。『景德伝灯録』は「一千七百の公案」といわれ、古来、禅者が最も読んだ書であり、禅宗史上に最も大きな影響を与えた書である。この書に対しては、人名項目の出典だけではなく、本文中にみられる箇所まで示しており、『景德伝灯録』の人名に関するかぎり、完璧なものといえよう。

次に便利な点は、嗣法の師の名を全項目にわたって示してある点である。禅宗の特色において師資をはっきりさせることは、面授を強調するところより、その人の宗風をみいだすことができるのであるが、たとえ伝記が明確でなくとも、師資の関係が明確になることは、禅の研究上欠かせない点である。特に諱の一字しかわからない時など、嗣法の師が書いてあることによって、研究が進んでいく場合もある。そして主な人名には、できうる限りにおいて生没年が、西歴で示してあるから一層便利である。

その外、四字の具名、二字の諱、後の一字

の諱および「↓」による別項の指示があるために、簡単な住居地などがわかる点や同一漢字はすべて一箇所にまとめられている点および部首検字と特に中国語音検字による検索可能な点は、外国の中国禅宗の研究者にとっても便利であろう。

次に第二の「正確」という点についてみてみたい。

このことは全項目について出典箇処の数字が誤りない点を問題にしなければならぬかもしれないが、そのような誤植の点についてここで問題にしているのではなく、編者が人名をカードに記録された態度についてみてみたい。

まず各頁にほとんどみられる「」の使用であり、原典を忠実に示して、私意でもってどちらかに統一するのではなく、別書で同名の人が、異った文字で示されているときは、「」の中に示されている。例えば雲居元祐の法嗣の一人を見るに、『建中靖国続灯録』巻二十一には「舒州白雲山海会守従」とあり、『続伝灯録』巻二十一には「舒州白雲山海会守従」とある場合、この索引では、「海会守従〔縦〕」（本書、四七頁）と示されていて、原典に忠実なことがわかるのである。こ

の所より『大慧普説』巻三には、「海会従」は灯史類とは異って、羅漢系南の法嗣とされるのはどうしてなのであろうか。などという問題が、利用する方へ課せられてくるのである。

「」の使用以外でも、原典に忠実である点は、次の例でもみい出せる。「天童善（嗣天衣義懷）↓天章元善」「天童元楚（嗣開先善暹）↓天章元楚」（本書、二六八頁）とある二人について、その示された『大正新修大藏経』の箇処を『続伝灯録』の目録でみるならば、誤りはないのであり、さらに『大正新修大藏経』の依った原本の明藏そのものに当たってみても間違いのないのである。さらに本伝そのものについて検討してみると、二人の「天童」というのは「天章」（『大正藏経』巻五十一—四九八bおよび五一四c）の誤りであらうと理解されるのは、索引を利用する方にまかせられていて、あくまでも原典に忠実に示されているのである。索引を取る原本が指定されている限り、この編者の方法は当然許されなければならない。

周知の事柄でこのことを具体的にすれば、さらに次のような例をあげることができよう。「石門慧徹（嗣梁山縁観・石門獻蘊、石

門獻）↓乾明慧徹」（本書、二一〇頁）とあり、『景德伝灯録』巻二十三には、石門獻の法嗣、『天聖広灯録』の目録は、梁山縁観の法嗣、『嘉泰普灯録』の目録および『五灯会元』巻十四は、石門蘊の法嗣となっており、石門慧徹は梁山の法嗣ではなく誤りであろうと、宇井伯寿博士が『第三禅宗史研究』で指摘されるのは、研究の結果いわれることである。

また「守忠↓蔣山守忠（嗣玉山徳珍）」と「守忠↓竜翔守忠（嗣霊隠徳珍）」（本書、一四八頁）と連続して出てくるのは、前者は『五灯会元続略』巻六、後者は『増集続伝灯録』巻六の表現であり、同一人が同一の師の法嗣であっても、住持の場所の違いにより表現を異にし、号である「曇芳守忠」（本書、二八九頁）からも引くことができるようにしてある。

以上のような例から示されるように、原典にあくまでも忠実であるとする態度は、編者の私意を入れられないで、この索引を作成された意図が読みとれるものである。

この「便利」と「正確」という二点からみると、この索引は編者の予想通りの成功であり、それを利用する者にとっては、編者が長年に渡って苦勞して来て作成されただけに

使えば使う程、そのありがたさが身にしみるのである。

この編者の限定された外から欲をいえば、次のような不満も当然聞くことができよう。

『景德伝灯録』のように、全資料にわたって、本文の人名も索引にして欲しい。あるいは、ここに使用された資料では、宋・元時代までは一応網羅することはできるとしても、明代以降においては不足であり、『大日本統藏経』にも明代以降の編になる灯史類が収められている。あるいは禅僧の伝記で基本となる碑文・碑銘を入れて欲しい。またこの著は

『大日本統藏経』の巻数が、香港の影印版の通し巻数で示されているので、一三六・一三七・一三八とあっても、慣れない人には、『建中靖国統灯録』か『聯灯会要』か『嘉泰普灯録』か『禅林僧宝伝』か『五灯会元』か不明であって、それぞれの略付号を使用し、またせめて巻数を示してあれば、和刻本で調査したいと思う人が使用可能ではないか、また原本が宋版や五山版のあるものはそれに依るべきではないかなどという意見である。印刷の関係と個人の仕事量の関係および最初に述べたように『大正新修大藏経』と『大日本統藏経』の索引である点からすれば、むしろ

索引は、利用する側の使い方にあるのではなからうか。鈴木哲雄先生の意図を測るならば、この索引によって、一步でも禅宗史研究が前進することを願っておられるし、また鈴木先生自身がこの索引を踏み台にして研究を前進したいと考えておられる訳である。この索引の性格をよく知れば、駒沢大学で学んでいる多くの唐・宋時代の禅宗史研究を志す人や鎌倉時代の禅およびそれ以後の日本禅を研究する人々に、この書がどれほど裨益するかはかりしれないものがあると確信するものである。

編者は「あとがき」に
木犀から、芙蓉・白萩・山茶花・寒椿と毎年ほぼ時を同じくして咲いていく。五年ほど前に十本ほど庭のあちこちに植えた梅が、今年はいっぱいに咲いた。梅の木の近くに立つと、清らかな香りがただよってきて、気持をほぐしてくれた。去年貰ったこぶしも彼岸には蓮華のように咲いた。海棠や桜桃や沈丁花は、今年は一時に咲いた。はやくもまたつつじが満開の艶を競う頃と
なっている。

と淡淡とその文を締めくくられている。この文の中に鈴木先生の長い孤独で厳しい苦勞の

跡が読みとれ、道元禅師が行持の巻で尊崇された大梅山法常禅師の「只見四山青又黄」の語を私は強く思い出している。

この索引の最も端緒になったのは、鈴木哲雄先生と共に、池田魯参・吉津宜英・伊藤隆寿の諸先生方と私も参加した高僧伝類のカード取りにはじまる。その年月は十年程たったことになるが、その後、鈴木先生は一人コツコツと続けて今回の出版になったのである。

この為に一時健康をそこなわれたとも聞いている。いつもの先生の口ぐせは「学問の方法論」であり、「該博な資料・緻密な論証・厳しい方法論・客観的な批判精神」と「序」にある立場をくずされない先生である。今後共に飛躍的な研究の発展を祈ってやまない。私もこの論集の一・二号に「景德伝灯録の問と答」の論文が未完のままに終わっていることを反省している。尻に火がついた気がして、なんとか先生の学恩に報いねばならないと、この著書を前にして新たな学問研究の決意をしているのである。

（名古屋 其弘堂書店 昭和五十年九月二十日刊 八〇〇〇円）